

幼児期における感情表出の調整に関する理解の発達

溝川 藍

1. はじめに

私たちは日々の生活の中で、喜び、怒り、悲しみ、驚きなど多くの感情を経験する。しかし、コミュニケーションの中で私たちが表出する感情は、常に内的な感情と一致しているわけではない。乳児期の子どもは、感情を喚起する状況と一致した感情表出を行っており (Hiatt, Campos, & Emde, 1979)、成長するにつれて、徐々に状況や相手との関係などに応じて表出を調整することができるようになる。感情表出の調整の多くは他者とのコミュニケーションの中で起こる。例えば、「期待はずれのプレゼントをもらってがっかりしたが、相手の気持ちを傷つけたくないので笑顔を見せる」、「相手の言動に腹が立ったが、人間関係を壊したくないので怒りを顔に出さない」といったように、感情表出は調整し得るものである。大人はこれを当然のこととして知っており、他者がある感情を表出していたとしても、表出者の置かれている状況等の様々な周辺情報をもとに本当の感情について推測しながら複雑なコミュニケーションを営むことができる。状況や相手に合わせた感情表出や他者の感情表出行動や他者の感情表出に関する解釈は、感情表出の調整に関する「理解」によって可能になり、その「理解」は経験を蓄積しながら獲得されるものである。このことを考えると、感情表出の調整に関する理解が円滑な対人関係の構築において欠かせないものであり、またその理解がどのようにして発達していくのかという問題は、感情の社会的な働きを考えていく上で重要なテーマであることがわかるだろう。

子どもが、何歳頃から見かけと本当の不一致について理解するようになるのかという問題については、これまで様々な側面から検討されてきた。Flavell, Flavell, & Green (1983) は、見かけと本当が異なる物体 (e.g. 岩石のように見えるが実際はスポンジ製のもの) を幼児に見せ、触らせた後で、「見かけ」と「本当」がそれぞれ何であるかを尋ねるという方法で、物体の見かけと本当の理解について調べた。一連の研究からは、3歳児には物体の見かけと本当の区別が難しいが4歳児には可能であるという結果が得られている (cf. Flavell, et al., 1983; Flavell, Flavell, & Green, 1987)。一方で、感情の見かけと本当の区別については、物体の見かけと本当の区別が可能な4歳児にも難しい (Gross & Harris, 1988; Harris, Donnelly, Guz, & Pitt-Watson, 1986; Josephs, 1994; Joshi & MacLean, 1994)。物体の場合とは異なり、本当の感情は見ることも触ることもできない。見かけの感情と本当の感情を区別する場合には、感情を喚起する状況や感情を抱く人の特性、偽りの感情を表出する動機などの情報を考慮しなければならず、そのために物体の見かけと本当を区別することよりも難しいのだと考えられる。

期待はずれのプレゼントをもらったときにも相手に笑顔を見せるというような、本当の感情とは異なる感情の「表出」は、発達的に見ると、3、4歳頃から可能になる (Cole, 1986)。しかし、3、4歳児は、まだ見かけの感情と本当の感情を意識的に区別できず、単に「プレゼントをもらったときは、いつも笑顔を見せる」という表示規則 (display rule) に従っているだけである (Josephs, 1994)。これに対して、見かけの感情と本当の感情の不一致を「理解できる」ようになるのは、表出の出現よりも遅く、6歳頃からであるといわれている (e.g. Harris, et al., 1986)。

人が意図的に感情表出を調整し得ることについて理解する能力は、他者との感情的な関わりを持つ上で重要な感情コンピテンスの1つであると考えられている (Saarni, 1999)。感情表出の調整に関する「理解」は、発達初期の感情表出の調整の経験、社会化、認知発達等の様々な要因に支えられて発達し、就学前の子どもに複雑で豊かなコミュニケーションを営むことを可能にする。

本稿では、感情表出の調整についての「理解」に関わる諸問題の中でも特に認知的発達の側面に重点を置いて、約30年に渡って行なわれてきた研究の概観を整理する¹⁾。また近年まで扱われることの少なかった意図的なネガティブ感情表出の機能やその理解に注目して議論を進めていく。さらにこれらの知見を踏まえて、今後の研究の展望を述べる。

2. 感情表出の調整の理解に関する研究の概観

表出される感情と内的な感情が必ずしも一致しないことの理解に関する一連の研究は、Saarni (1979) に始まる。Saarni (1979) は、児童 (6、8、10歳児) を対象に仮想場面を用いた調査を実施し、主人公が内的な感情を隠す必要のある場面でどのような感情を表出するかを尋ねた。その結果、10歳児が6歳児と8歳児よりも見かけの感情 (表出する感情) と本当の感情 (内的に経験されている感情) を区別していることが示された。

その後 Harris ら (1986, 実験2) は、幼児期の子どもの見かけの感情に関する理解を調べるために、Saarni の実験パラダイムを4歳児向けに修正し、幼児 (4、6歳児) を対象とした実験を行なった。Harris ら (1986) が使用した課題では、主人公がポジティブまたはネガティブな感情を感じていながら、その表出を抑制しようとする8つの場面が設定されていた。例えば、「主人公はおかしな服を着たおばあさんを見たが、怒らせるといけないので自分の気持ちを隠そうとしている (ポジティブ感情の表出抑制)」、「主人公は転んだが、友達に笑われたくないので自分の気持ちを隠そうとしている (ネガティブ感情の表出抑制)」というような、感情を喚起する出来事と感情調整の動機を含むストーリーを幼児に聞かせた。ストーリーの提示後、主人公の本当の感情 (「主人公は、本当はどんな気持ちだったかな」と見かけの感情 (「主人公は、どんな顔をしようとしていたかな」) について質問した。参加児は、主人公の本当の感情と見かけの感情について、「喜び」、「悲しみ」、「普通」の表情図の中から選択し、その選択について理由づけすることを求められた。その結果、6歳児は4歳児とは異なり、感情の見かけと本当を区別し、さらに適切な理由づけができることが示された。つまり、6歳児は、ポジティブ感情の表出抑制場面で本当の感情は見かけの感情よりもポジティブであると捉え、ネ

ガティブ感情の表出抑制場面で本当の感情は見かけの感情よりもネガティブであると捉えていたが、4歳児は、感情の見かけと本当に差異がないと判断していた。また4歳児では理由づけがほとんどなされなかったのに対して、6歳児ではより多くの理由づけが生成され、内容もより正確であった。ただし、課題のストーリーによって回答傾向に違いがあり、4歳児でもネガティブ感情の表出抑制に関しては、ある程度の理解を示していることが示された。

Harrisら(1986)の研究をきっかけに、幼児を対象とした感情表出の調整に関する理解を調べる研究が多く行なわれ、これらの研究のほとんどが4歳から6歳の間に見かけの感情と本当の感情の区別が可能になるという一致した見解を示している(Banerjee & Yuill, 1999; Gnepp & Hess, 1986; Gross & Harris, 1988; Harris & Gross, 1988; Josephs, 1994; Joshi & MacLean, 1994; 溝川, 2007)²⁾。また文化差を検討した研究においては、アメリカ・イギリス・日本の子どもたちの間で感情の不一致を理解できるようになる時期に違いがないことも示されている(cf. Gardner, Harris, Ohmoto, & Hamazaki, 1988)。

本当の感情とは異なる感情の表出は、表出者の内的な感情状態について、他者に誤った推測(e.g.「笑顔でいるから、喜んでいるのだろう」)をさせることにつながる。Gross & Harris(1988)は、単に子どもが見かけの感情と本当の感情を区別できるかどうかだけでなく、課題中の主人公が見かけの感情を表出することによって他の登場人物(課題中の他者)が本当の感情についての誤信を抱くことの理解についても検討を行なった。その結果、6歳児は4、5歳児よりも、主人公の見かけの感情の表出によって他の登場人物が誤信を抱くことについて理解していることが示された。例えば、主人公が「悲しみ」を隠して「喜び」を表出したとき、6歳児は、「他の登場人物は、(主人公の笑顔から)主人公が『喜び』感情を抱いていると推測する」と判断した。他方、4、5歳児は、「主人公の本当の気持ちは悲しいのだから、他の登場人物は主人公が『悲しみ』感情を抱いていると推測する」と判断した。このような他者の誤信の理解について調べることは、幼児が、表面的な感情の見かけと本当の区別にとどまらず、表情を偽ることが他者の心的状態(この場合は信念)に及ぼす影響まで認識しているかどうかを知る手がかりとなる。

以上に述べたように、4歳から6歳の間は、見かけの感情と本当の感情の矛盾を理解し始める重要な時期である。ただし、感情表出の調整に関する理解の発達は幼児期で終わるわけではない。児童期を通じて、感情表出の調整の動機についての理解が進み、自発的に複雑な動機に言及できるようになることも示されている(Saarni, 1979; Zeman & Garber, 1996)。

3. 感情表出の調整の理解に関わる要素

次に、感情表出の調整の理解に関わるいくつかの要素について見ていくこととする。先行研究からは、感情表出の調整に関する理解が可能になる時期には、表出を調整する動機(Gnepp & Hess, 1986)や感情の種類(Harris, et al., 1986)によって違いがあること、感情表出の調整の理解は、誤信理解のような認知的な発達と関連すること(e.g. Banerjee & Yuill, 1999)が示されている。

3-1. 感情表出の調整の動機

感情表出を調整する動機については、Gnepp & Hess (1986) による「自己防衛的動機 (self-protective motive)」と「向社会的動機 (prosocial motive)」という分類が一般的である。Gnepp & Hess (1986) の定義によると、「自己防衛的動機」は、自尊心を保ち、自分が損失を避け利益を得ることを目的とし、「向社会的動機」は、他者の気持ち (feeling) を守ることを目的とするものである³⁾。異なる動機による感情表出の調整に関する理解が年齢によってどのように変化するかという観点から、いくつかの研究が行なわれている。

Saarni (1979) は、児童 (6、8、10 歳児) に仮想場面の主人公が感情表出を調整するストーリーを提示し、主人公の動機について尋ねた。その結果、児童期前期の子どもの大半が、「悪い結果を避ける」、「自尊心を保つ」といった自己防衛的動機に言及していたのに対し、児童期後期の子どもは、自己防衛的動機以外の動機にも言及するようになることが示された。Gnepp & Hess (1986) は、同じく児童を対象に、仮想場面の主人公が自己防衛的動機あるいは向社会的動機に基づいて感情表出を調整するストーリーを提示し、向社会的動機に基づく感情表出の調整の方が早期から学習されていることを示した。また、児童にネガティブ感情表出の抑制場面の動機について問うた Zeman & Garber (1996) は、自己防衛的動機への言及が多く見られることを示している。幼児期を対象とした研究においても、感情表出を調整する動機の理解に関する見解は一致していない。たとえば、仮想場面の登場人物の感情表出の調整について、自発的な動機への言及を求めた澤田 (1997) と、あらかじめ動機を設定して、その動機に基づく感情表出の調整を理解できるかどうかを調べた Josephs (1994) では、どちらも自己防衛的動機と向社会的動機の間に理解の差異は認められなかった。一方、澤田 (1996) では、ネガティブ感情表出の抑制場面で、自己防衛的動機の方が向社会的動機よりもよく理解されていることが示された。ただし、先行研究では、動機の種類に着目しており、課題中で扱われた抑制される感情の種類は研究間で一貫していない。この抑制する感情の種類の違いも結果に影響しているものと考えられる。

先行研究の結果は一致していないが、幼児期には、自己防衛や罪責逃れのための意図的なうその発言が見られる一方で、愛他的なうそがほとんど見られないことなどから、表情の偽装に関しても初めは自己防衛的動機によるものの方が理解されやすいのではないかと考えられる。もちろんこれらの動機は互いに排他的なものではなく、「嫌な顔を見せて相手の気持ちを傷つけない」という向社会的な動機と「嫌な顔を見せることで相手に嫌われたくない」という自己防衛的な動機が同時に生起することも十分にあり得る。また両者の共通点としては、対人的な文脈の中で生じる動機であること、どちらの動機もそもそも「他者」の存在がなければ起こり得ないものであることが挙げられる (cf. Saarni, Campos, Camras, & Witherington, 2006)。

3-2. 感情の種類

3-2-1. 感情の種類による理解の違い

幼児は、仮想場面の主人公がポジティブな感情を隠して中立表情またはポジティブ表情をすること (例. 変わった服を着た人を見ておもしろいと思ったが、その気持ちを隠す) よりも、

ネガティブな感情を隠して中立表情またはポジティブ表情をすること（例．転んでしまったことが悔しくて悲しかったが、その気持ちを隠す）について、よりよく理解しているようである（e.g. Harris et al., 1986）。特にポジティブな感情を隠すことの理解は、4歳児には難しく、その理由としてHarrisら（1986）は、表情の偽装を経験する頻度の違いを挙げている。その他にも、ポジティブ感情とネガティブ感情の社会的望ましさの違い及び親や教師によるしつけも、感情の種類による理解の違いに影響しているものと考えられる。

3-2-2. 偽りのネガティブ感情表出

6歳頃から他者の感情の見かけと本当を明確に区別できるようになることの証拠は、これまでも多く示されてきたが、先行研究では感情の抑制に関心が寄せられており、課題が本来どのような感情を表出する場面であったかという点に注目した研究は少ない。感情の表出という視点で見えていくと、先行研究で用いられたネガティブ感情の表出抑制場面のほとんどが、「期待はずれのプレゼントをもらったとき、がっかりした気持ちを隠して笑う」（Saarni, 1979）といったように、ポジティブ感情の表出を予想させるものであった。それに対して、ポジティブ感情の表出抑制場面の大半が、「変わった服を着たおばさんが通り過ぎたときに、おもしろいと思う気持ちを隠して真顔をする」（Harris, et. al., 1986）といったように、ニュートラルな感情の表出を予想させるものであった。感情の見かけと本当の区別に関するどの先行研究においても、「本当の感情を隠してネガティブな感情を表出する場面」は検討されていない。唯一、Bennett & Knight（1996）では、「本当の感情を隠して悲しい顔をする場面」が想定されているが、それも課題の前の練習段階における使用であり、この場面自体への幼児の反応は明らかにされていない。しかし、「本当は悲しくないにも関わらず悲しみを表出する（＝偽りの悲しみを表出する）」という場面は、本来的に子どもが日常生活でよく経験するところであり、これを取り出して扱う意義がある。

期待はずれのプレゼント場面にあるような偽りのポジティブ感情の表出は、社会や文脈の中で適切とされる表出である。一般に、大人は子どもに対してポジティブ感情の表出ができてほしいという期待を抱いており、それがしつけの中で明示されることも多い。例えば、子どもが誰かから嫌なものをもらったとき、親は「ニコリしなさい」、「ありがとうと言いなさい」などと子どもにポジティブ感情の表出を促すことがある。本当に感じている感情をそのまま表出せず、代わりに、よりポジティブな感情を表出するという感情調整はよく経験され、それゆえに子どもにとって意識されやすいものでもあると言える。

他方、偽りの悲しみ表出は、偽りの喜びの表出とは異なり、大人から表出を奨励される場面はほとんどなく、しつけとの関連は弱いと考えられる。また、悲しみ表出は、子どもにとって、慰められるなどのポジティブな効果をもたらすものであるが、自分が弱虫だと思われるなどのネガティブな効果を併せ持つことが多い。さらに、社会的な表出適切性とも関係が薄く、悲しみを表出すべきとされる場面は少ない。それでも、子どもは、赤ん坊の頃から、泣きなどのネガティブな表出を巧みに利用して、養育者と関わっているように思われる。Reddy（1991）は、生後8カ月の赤ん坊が、ミルクが欲しいときに泣くふりをする（涙は流さず泣いているかのように大声を出す）という両親の報告を紹介している。また2歳児が、母親から援助（なぐさめ）

を引き出すために、母親の方を向いているときには悲しみを多く表出することも示されている (Buss & Kiel, 2004)。このような表出は、生存の必要性によって極めて早い時期から行動として現れるものの、特別な状況を除いて大人から教えられることがほとんどないという特質から、後の発達においても、偽りのポジティブ感情の表出と比べて意識されにくいものであると考えられる。これまでの研究からは、偽りの悲しみ表出の理解が偽りの喜び表出の理解よりも遅れるものの4歳から6歳の間に発達すること、向社会的動機による偽りの悲しみ表出の理解は6歳児にとっても容易ではないこと等が示されている (溝川, 2007)。偽りの悲しみ表出の理解には、これまでも多くの研究がなされてきた偽りの喜び表出の理解 (cf. Saarni, 1979) とは異なる発達過程があると考えられ、子どもの認知的、社会的発達を明らかにする上で、詳細に検討していく必要がある。

3-3. 認知発達との関連

本当の感情を隠して笑顔を表出することによって、それを見る者は、表出者の内的な感情状態について「うれしい気持ちである」という誤った信念を抱き得る。感情表出の調整の動機や意図を理解するためには、「主人公は、『自分が本当の感情を表出したら、相手が嫌な気持ちになるだろう』と思っている」というような再帰的な埋め込み式の思考が必要であるとの考えから、1980年代から、感情表出の調整の理解への再帰的思考の影響について検討する必要性が唱えられてきた (Harris & Gross, 1988)。近年になってようやく、見かけの感情表出を理解する能力と「心の理論」の発達との関連を検討する研究がいくつか行なわれている (Banerjee & Yuill, 1999; 宮本, 1998; Mizokawa & Koyasu, 2007)。ここでは、見かけの感情の理解と心の理論の関連について調べた3つの先行研究を紹介することとする。

心の理論とは、「目的・意図・知識・信念・思考・ふりなどの内容から、他者の行動を理解したり推測したりすることができる能力」と広く捉えられるものである (Premack & Woodruff, 1978) が、ここでは、「自分は知っているが他者は知らない状況において、自分の考えとは異なる他者の誤信念や行動を推測する能力」という狭義の心の理論を扱う。この心の理論の獲得は誤信念課題への通過によって測られることが多い。誤信念課題には、一次の誤信念の理解を調べるもの (一次的誤信念課題) と、二次の誤信念の理解を調べるもの (二次的誤信念課題) がある。ここでいう『一次 (first-order)』とは、「心的状態を持つこと」であり、例えば「AさんはXと思っている」ことの理解は一次の信念の問題である。また、「二次 (second-order)」とは、「心的状態についての心的状態を持つこと」であり、「Aさんは「BさんはYと思っている」と思っている」といった入れ子構造の形式をとるものである。このような思考の理解は、二次の信念の問題である (cf. 林, 2006; Perner & Wimmer, 1985)。一次的誤信念課題には4歳から6歳の間に通過することが知られている (Perner, 1991; Wimmer & Perner, 1983)。二次的誤信念課題は児童期の6歳から9歳の間に通過できるようになるとされてきた (Perner & Wimmer, 1985)。その後、幼児向けに課題要求を低減した二次的誤信念課題も紹介されている (Sullivan, Zaitchik, & Tager-Flusberg, 1994; 林, 2002)。

宮本 (1998) は、課題の登場人物がネガティブな感情を感じているもののポジティブまたはニュートラルな感情を表出する動機を持つストーリーを用いて、心の理論の視点から幼児の表

情偽装の理解について調べた。その結果、表情の偽装の理解と一次的誤信念課題（スマーティー課題⁴⁾；Perner, Leekam, & Wimmer, 1987）の成績との関連が見出された。Banarjee & Yuill（1999）は、別の感情を感じていながらの偽りの感情表出（ポジティブまたはニュートラル）に関する幼児の理解と二次的誤信念の理解との関連を調べた。その結果、自己演出的動機（弱虫と思われたいくないので平気な顔をするなど、自己についての評価をコントロールすることを目的とするもの）による偽りの感情表出の理解と二次的誤信念課題（Sullivan, et al., 1994）の成績に関連があることが示された。幼児を対象に、見かけの泣きの理解と心の理論の獲得との関連を検討した Mizokawa & Koyasu（2007）からは、見かけの泣きが本当の泣きとは異なることの理解は4歳から6歳の間に発達し、その発達は一次的誤信念課題及び二次的誤信念課題の正誤と関連することが示されている。

このように、見かけの感情の理解と誤信念課題の成績の間に関連があることが示されてきているものの、偽りの感情理解の認知的基盤を明らかにするためには、さらなる研究が求められる。感情表出の調整を理解するためには、表出された「見かけの感情」に影響されずに、表出者の意図や動機を考慮して目には見えない内的な感情を考えなくてはならない。この点から、感情の見かけと本当を区別する能力は、抑制制御の側面とも関連することが予想され、今後の研究の展開が期待される。

ところで、日常場面の中で表出される偽りの感情の多くは、見る者を表出者の内的な感情状態の正確な推測に失敗させることに導くものである。これに対して、ふり遊びとしての表出された偽りの感情（e.g. 家族ごっこの中で、赤ちゃん役になり泣いているふりをする、お母さん役になり怒っているふりをする）は、他者を誤った感情の推測へ誘導することを目指すものではない。4歳児には他者をだますことが難しいとの知見から（cf. Wimmer & Perner, 1983）、だましとは関連しない「ふり遊びとしての偽りの感情表出」の理解は早期から見られるのではないかと考えられてきた（Gross & Harris, 1988）。まだ実証的な研究は少ないが、ふり遊びの嘘泣きに関しては、だましのための嘘泣きよりも早く理解されることが明らかになっており、ふり遊びの文脈においては見かけの感情と本当の感情を区別する能力が早期から発揮される可能性が示唆されている（Mizokawa, in press）。

3-4. 社会的発達との関連

3-4-1. 見かけの感情表出の理解と社会的相互作用

私たちがコミュニケーションの中で表出する感情の多くが、場面や相手に合わせて調整されたものであることを考えると、見かけの感情についての理解は、子どもの他者との相互作用にも影響することが考えられる。溝川・子安（印刷中）は、5、6歳児を対象に、誤信念の理解度別に、見かけの感情表出についての理解と園における他者との相互作用の関連を検討し、その結果、一次の誤信念の理解度が低い子どもたちにおいては、隠された感情の理解ができる者ほど、同情的・共感的行動が少なく、また良質な仲間関係を築いていないことが示された。一方で、Cassidy らの研究からは、見かけの感情と本当の感情を区別する能力と社会的相互作用の間に関連は見られないことが示されており（Cassidy, Werner, Rourke, Zubernis, & Balaraman, 2003）、その知見は一貫していない。これらの研究では、見かけの感情と本当の感

情の理解について感情の種類や動機は考慮していないが、例えば、偽りの悲しみ表出についてよく理解している者ほど、同情・共感的行動が少ないといったことや、向社会的動機による見かけの感情表出についてよく理解している者ほど向社会的行動が多いといったことがあるのかについても検討する必要があるだろう。

3-4-2. 見かけの感情表出の社会的機能の理解

他者との社会的な関係を構築していく上で、感情表出を調整することが他者の心（感情・信念）や行動に与える影響について理解することは重要である。感情表出の社会的機能について検討するために、近年、面接法を用いて子どもの感情理解にアプローチする手法が見られている。久保（2007）は、幼児に対して5歳時点と6歳時点で面接調査を行ない、5歳時点では参加児の半数が、6歳時点ではその大半が、悲しみ表出の機能として「それに接した者の共感的な感情を惹起し、表出者への向社会的な行動を促すこと」を語ることを見出した。久保（2007）の方法に倣って筆者が実施した幼児期の嘘泣きの機能に関する面接調査からは、嘘泣きと本当の泣きを区別できる子どもの中に、「嘘泣きの表出者に向社会的行動を取る」と判断する者と「嘘泣きの表出者を助けてあげない」と判断する者がいることが示されている（溝川，2009）。また、幼児がどのような場面で「嘘泣きは他者の向社会的行動を誘発する」と捉えているのかを検討するために実施した仮想場面を用いた研究からは、見かけの感情の社会的機能についての認識が年齢によって異なる可能性が示唆されている。4歳児は嘘泣き表出者に対する被害がない状況（e.g. ペンを貸してほしくて嘘泣きをして見せる）よりも、被害がある状況（e.g. 砂山を壊されたので嘘泣きをして見せる）において、他者は嘘泣きの表出者に向社会的行動を取ると判断しており、5歳児は、被害がない状況でも嘘泣きの表出者の感情や受け手の共感的感情を考慮して、向社会的行動を取ると判断するようになることが示されている（溝川，印刷中）。この結果は、4歳から5歳の間に他者の心的状態に関する理解が進み、被害状況だけでなく表出者や受け手の心に関する推測をもとに、感情表出者に対する行動を決めることができるようになる可能性を示唆している。

4. 今後の展望

感情の見かけと本当に関する理解は幼児期に飛躍的に発達し、児童期以降もその理解は深まっていく。Figure 1 は、調整された感情の表出者とその受け手の内的プロセスを示したものである。

見かけの感情の表出者は、当該状況の中で、感情を偽る動機を持ち、内的感情と異なる感情を表出する。受け手はその表出を見て、表出者の内的感情について推測したり、表出についての誤信念を抱いたり、共感を覚え、表出者に対する行動を決定する。

本論文で概観したように、これまでの感情表出の調整の理解に関する研究では、特に感情表出を調整し得ること（見かけの感情と本当の感情の不一致）の理解、感情表出を調整する動機の理解、調整された感情表出が受け手に与える影響の理解についての知見が積み重ねられてきた。さらに、見かけの感情と本当の感情を区別する能力の発達と誤信念の理解との関連及び社

会的相互作用との関連も検討され始めている。しかしながら、感情の働きを考えていく上で、未だ検討の不足している側面がある。Figure 1 で挙げた枠組みの中での検討課題については本稿の中で随時述べてきたが、最後にこの枠組みを超えた今後の課題について述べることにする。

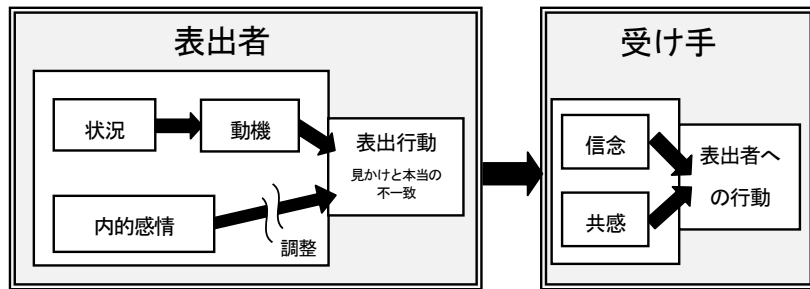


Figure 1 調整された感情の表出者と受け手の内的プロセス

子どもの感情表出の調整「行動」を調べる研究と比べて、感情表出の調整に関する「理解」を調べる研究においては、主な研究手法として仮想場面が用いられ、その登場人物の内的感情や表出行動、その結果として引き出される他者の反応等が子どもに問われてきた。他者との関わりの中で獲得される感情表出の調整に関する知識は、子どもたちの直接的または間接的な経験によって作られる。子どものネガティブ感情の表出に対する両親の反応は、幼児の感情理解や友人関係に影響することが知られているが (McElwain, Halberstadt, & Volling, 2007)、大人が子どもの隠された感情にどの程度気づいているのか、どのように反応しているのか、またどのような判断や理解に基づいてその反応を変化させているのかについて調べた体系的な研究はまだないようである。例えば、子どもが意図的に悲しみを表出している際に、大人がそのことを見抜いていたとしても、子どもに援助が必要な状況であるとの認知や子どもが自分自身で当該の事態を解決できない年齢であるとの判断から、なぐさめたり援助することもあるだろう。子どもが偽りの表出によって目標とする反応を得られる経験をしたり、偽りの感情表出をもってしても思い通りにならなかったり、あるいは偽りの感情表出を見破られて叱られるという経験をするとは、感情表出の調整「行動」だけでなく、本当の感情と見かけの感情を区別する能力や、偽りの感情表出の社会的機能の理解にも影響を与えられと考えられる。今後の研究では、子ども自身の個々の感情的な体験の積み重ねが、どのように感情表出の調整に関する「理解」を形作っているかという問題に答えていくことが必要となる。

また、子どもが相手（友人、父親、母親、保育士等）によって感情表出を変化させているという「表出行動」の側面に関する報告はいくつかある一方で (e.g. Shipman, Zeman, Nesin, & Fitzgerald, 2003)、彼らが、表出者の側の特性（性別、年齢）によって、見かけの感情表出の社会的な働きがどのように変わると捉えているのかについては、未だに明らかになっていない。幼児が感情と性別のステレオタイプ (e.g. 男性は怒り、女性は悲しむ) を持つこと (Parmley & Cunningham, 2008)、幼児期には他者の特性の理解が始まり、ある人の特性に関する情報を与えると、その特性と一致した行動を予測すること (Liu, Gelman, & Wellman, 2007) も知ら

れており、同じ状況においても表出する子どもの性別や特性が異なればその感情表出の働きに関する認識のされ方が異なるのか、また認識が異なるとすればどのように異なるのかを検討していくことも今後の重要な課題である。

謝 辞

本論文の作成にあたり、ご指導いただきました京都大学大学院教育学研究科の子安増生先生に深く感謝申し上げます。

(注)

- 1) 1990年代前半までの研究の動向については、平林(1993)を参考にされたい。
- 2) ただし課題要求を軽減した課題を用いると3歳児でも見かけの感情を理解することができるという報告もある(Banerjee, 1997)。
- 3) 一部の研究者は、感情を隠す動機をより細かく分類して検討している。例えば、Josephs (1994)は、Gnepp & Hess (1986)の「自己防衛的動機」をさらに2つに分け、自分の感情を守ることを目的とするものを自己防衛的動機、自分が損を避け利益を得ることを目的とするものを自己中心的動機(self-central motive)としている。また、Banerjee & Yuill (1999)は、自己についての他者の評価をコントロールすることを目的とする自己演出的動機(self-presentational motive)に注目し、二次的な思考の獲得という観点からその理解について検討を行なっている。ただし、この自己演出的動機も、Gnepp & Hess (1986)の広義の自己防衛的動機に含まれると考えられる。
- 4) 心的状態の理解を調べる誤信念課題の一種。この課題では、子どもにスマーティー(チョコレート菓子)の箱の中にスマーティーではない別のもの(鉛筆)が入っているのを見せた後で、箱の中身を知らない友だちがどのような信念を持つかを尋ねることにより、他者の誤信念の理解を調べることができる。

引用文献

- Banerjee, M. (1997). Hidden emotions: Preschoolers' knowledge of appearance-reality and emotion display rules. *Social Cognition*, 15, 107-132.
- Banerjee, R. & Yuill, N. (1999). Children's understanding of self-presentational display rules: Associations with mental-state understanding. *British Journal of Developmental Psychology*, 17, 111-124.
- Bennett, M., & Knight, M. (1996). Children's understanding of the distinction between real and apparent emotions: A training study. *Journal of Genetic Psychology*, 157, 267-274.
- Buss, K. A. & Kiel, E. J. (2004). Comparison of sadness, anger, and fear facial expressions when toddlers look at their mothers. *Child Development*, 75, 1761-1773.
- Cassidy, K. W., Werner, R. S., Rourke, M., Zubernis, L. S., & Balaraman, G. (2003). The relationship between psychological understanding and positive social behavior. *Social Development*, 12, 198-221.
- Cole, P. M. (1986). Children's spontaneous control of facial expression. *Child Development*, 57, 1309-1321.
- Flavell, J. H., Flavell, E. R., & Green, F. L. (1983). Development of the appearance-reality distinction. *Cognitive Psychology*, 15, 95-120.
- Flavell, J. H., Flavell, E. R., & Green, F. L. (1987). Young children's knowledge about the apparent-real and pretend-real distinctions. *Developmental Psychology*, 23, 816-822.

- Gardner, D., Harris, P. L., Ohmoto, M., & Hamazaki, T. (1988). Japanese children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *International Journal of Behavioral Development*, 11, 203-218.
- Gnepp, J., & Hess, D. L. R. (1986). Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, 22, 103-108.
- Gross, D., & Harris, P. L. (1988). False beliefs about emotion : Children's understanding of misleading emotional displays. *International Journal of Behavioral Development*, 11, 475-488.
- Harris, P. L., Donnelly, K., Guz, G. R., & Pitt-Watson, R. (1986). Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, 57, 895-909.
- Harris, P. L. & Gross, D. (1988). Children's understanding of real and apparent emotion. In J. W. Astington, P.L. Harris & D.R. Olson (Eds.), *Developing theories of mind*. (pp.295-314). New York: Cambridge University Press.
- 林 創 (2002). 児童期における再帰的な心的状態の理解. 教育心理学研究, 50, 43-53.
- 林 創 (2006). 二次の心的状態の理解に関する問題とその展望. 心理学評論, 49, 233-250.
- Hiatt, S., Campos, J., & Emde, R. (1979). Facial patterning and infant emotional expression: Happiness, surprise, and fear. *Child Development*, 50, 1020-1035.
- 平林秀美 (1993). 情動表出の制御に関する発達の研究の概観と展望. 東京大学教育学部紀要, 33, 135-142.
- Josephs, I. E. (1994). Display rule behaviour and understanding in preschool children. *Journal of Nonverbal Behavior*, 18, 301-326.
- Joshi, M. S. & MacLean, M. (1994). Indian and English children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, 65, 1372-1384.
- 久保ゆかり (2007). 幼児期における感情表出についての認識の発達 —5 歳から 6 歳への変化. 東洋大学社会学部紀要, 44, 89-105.
- Liu, D., Gelman, S. A., & Wellman, H. M. (2007). Components of young children's trait understanding: Behavior-to-trait inferences and trait-to-behavior predictions. *Child Development*, 78, 1543-1558.
- McElwain, N. L., Halberstadt, A. G. and Volling, B. L. (2007). Mother- and father-reported reactions to children's negative emotions: Relations to young children's emotional understanding and friendship quality. *Child Development*, 78, 1407-1425.
- 宮本祐子 (1998). 表情偽装状況の理解における幼児の“心の表象理論”の利用. 心理学研究, 69, 271-278.
- 溝川藍 (2007). 幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解. 発達心理学研究, 18, 174-184.
- 溝川藍 (2009). 幼児期における嘘泣きについての認識の発達. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 55, 117-129.
- 溝川藍(印刷中). 4, 5 歳児における嘘泣きの向社会的行動を引き出す機能の認識. 発達心理学研究, 22.
- Mizokawa, A. (in press). Young children's understanding of pretend crying: The effect of context. *British Journal of Developmental Psychology*.
- Mizokawa, A. & Koyasu, M. (2007). Young children's understanding of another's apparent crying and its relationship to theory of mind. *Psychologia*, 50, 291-307.
- 溝川藍・子安増生 (印刷中). 5, 6 歳児における誤信念及び隠された感情の理解と園での社会的相互作用の関連. 発達心理学研究, 22.
- Parmley, M., & Cunningham, J. G. (2008). Children's gender-emotion stereotypes in the relationship of anger to sadness and fear. *Sex Roles*, 58, 358-370.
- Perner, J. (1991). *Understanding the representational mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Perner, J., Leekam, S. R., & Wimmer, H. (1987). Three-year olds' difficulty with false belief: The case for a conceptual deficit. *British Journal of Developmental Psychology*, 5, 125-137.

- Perner, J. & Wimmer, H. (1985). "John thinks that Mary thinks that..." : Attribution of second-order beliefs by 5- to 10-year-old children. *Journal of Experimental Child Psychology*, **39**, 437-471.
- Premack, D., & Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and Brain Sciences*, **1**, 515-526.
- Reddy, V. (1991). Playing with other's expectations: Teasing and mucking about in the first year. In A. Whiten (Ed.), *Natural theories of mind: Evolution, development and simulation of everyday mind reading* (pp. 143-158). Oxford: Basil Blackwell.
- Saarni, C. (1979). Children's understanding of display rules for expressive behaviour. *Developmental Psychology*, **15**, 424-429.
- Saarni, C. (1999). *The development of emotional competence*. New York: Guilford.
- Saarni, C., Campos, J. J., Camras, L. A. & Witherington, D. (2006). Emotional development: Action, communication, and understanding. In W. Damon (Series Ed.) & N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional and personality development* (6th ed) (pp. 226-299). New York: Wiley.
- 澤田忠幸. (1996). 幼児期における隠された感情の理解の発達. 日本発達心理学会第7回大会発表論文集, 128.
- 澤田忠幸. (1997). 幼児期における他者の見かけの感情の理解の発達. 教育心理学研究, **45**, 416-425.
- Shipman, K. L., Zeman, J., Nesin, A. E., & Fitzgerald, M. (2003). Children's strategies for displaying anger and sadness: What works with whom? *Merrill-Palmer Quarterly*, **49**, 100-122.
- Sullivan, K., Zaitchik, D., & Tager-Flusberg, H. (1994). Preschoolers can attribute second-order beliefs. *Developmental Psychology*, **30**, 395-402.
- Wimmer, H. & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.
- Zeman, J. & Garber, J. (1996). Display rules for anger, sadness, and pain: it depends on who is watching. *Child Development*, **67**, 957-973.

(日本学術振興会特別研究員 教育認知心理学講座 博士後期課程3回生)
(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

A Review of Research on Young Children's Understanding of Regulated Emotional Expression

MIZOKAWA Ai

Over the past 30 years, researchers have demonstrated that children's understanding of mind and emotion develops throughout their childhood. One such ability, the understanding of how to regulate emotional expression, emerges from ages 4 to 6 and has been seen as an important element of social competence. To understand how to control emotional expression in a social context, children need to realize that inner emotional states need not necessarily correspond to outer expressions, and, by extension, that these expressions can lead to an onlooker's false belief about the expresser's inner emotions. This article reviews empirical researches, and shows some social and cognitive factors that may affect understanding of the regulation of emotional expression and its development. Relevant issues are discussed, and promising directions for future research are suggested.